派遣研究員

氏　　名	根敦阿斯尔
所　　属	歴史民俗資料学研究科　博士後期課程
派遣期間	2017 年 1 月 26 日～2017 年 2 月 15 日
派 遣 先	フランス国立高等研究院　東アジア文明研究センター
研究課題	ヨーロッパにおける仏教の諸相 ―チベット仏教への関心を事例として

フランスにおけるチベット仏教の研究
フランスの国立高等研究院への調査報告

根敦阿斯尔

はじめに

フランスという国に対して、筆者はかねてから良いイメージを持っていた。特にパリは、フランスの歴史文化の中心地であり、夢を抱く人々が憧れる魅力的な町である。のみならず、パリは文化的水準が高く、他の文化とも交流してきた心の広さを感じさせるため、私の好きな町であった。そのため、今回の神奈川大学非文字資料研究センターとフランス国立高等研究院東アジア文明研究センター（Centre de recherches sur les civilisation de l' Asie orientale CRCAO）の交流プログラムの一環として、3 週間にわたって派遣研究に参加する機会をいただけたことは、非常に幸運であった。

Ⅰ　フランス国立高等研究院東アジア文明研究センターへの調査

現在、筆者はチベット仏教寺院における「伝統と革新」に関する調査・研究を進めているが、2017 年 1 月 26 日から 2 月 15 日までの 3 週間にわたり、フランス国立高等研究院東アジア文明研究センターにて派遣調査を行った。派遣調査に至った動機は、第二次世界大戦の戦前戦後にかけて内モンゴルやチベット地域から収集された資料を調査し、あわせて 19 世紀から現在までのヨーロッパにおけるチベット仏教の著名な研究者の足跡を辿ることにある。主な調査目的は大きく二つに分けられ、一つはこれまでにチベット仏教に関するさまざまな研究成果を確立してきた東アジア文明研究センターの文献資料を調査し、同センターの研究者との意見交流を実施することである。そしてもう一つは、ギメ東洋美術館（Musée Guimet）で展示中のチベット仏教に関する資料の調査であった。

今回の調査では、2013 年度まで国際チベット研究協会の主席であった著名な人類学者ランボ（Charles Ramble）教授の指導を受けたことである〔写真 1〕。ランボ教授からチベット仏教に関する研究実績や多くの資料などを紹介していただいた。またフランス国立高等研究院東アジア文明研究センターの図書館では教授のおかげで迷うことなく、すべての資料を見つけ出し、その一覧を作成することができた。さらに責任者ペニコ（Marine Penicaud）氏の案内で、東アジア文明研究センターの中国研究室でスキャナーやカメラを使って、論文の資料を撮影することもできた。同時に、ランボ教授が現在研究しているネパールにおけるボン教のドルマという供物の資料も紹介していただいた。ボン教のドルマに関する資料と筆者自身が研究しているバリン儀礼を比較しながら、意見交換を行い、ランボ教授のご意見を伺えたことは良い経験となった。

また、博物館で資料収集する過程で、重要な発見もあった。例えば、ギメ東洋美術館のチベット展示エリアでたくさんのチベット仏教の法具用品、仏像、タンカ（仏画）などを見つけられたことである〔写真 2、3〕。それらのモノ資料（実物）の写真についても、今後の研究で紹介していきたい。

Ⅱ　ヨーロッパにおけるチベット仏教の研究とイメージの形成

周知のように、ハンガリー人であるチベット学者チョ

◉写真１　ランボ教授と筆者

◉写真２　ギメ東洋美術館に展示されていた法器
Musée national des arts asiatiques - Guimet (MNAAG), Paris

◉写真３　ギメ東洋美術館に展示されていた仏画
Musée national des arts asiatiques - Guimet (MNAAG), Paris

ーマ（Kőrösi Csoma Sándor、1784〜1842）は、現在のラダックにあるチベット仏教寺院でチベット語を学び、世界で最初に『*A DICTIONARY TIBETAN AND ENGLISH*（蔵英辞典）』[1]を編纂した。彼が編纂した蔵英辞典は後世の国際チベット学の発展に寄与した。そのため、チョーマは西洋のチベット学界の父と尊称されている。

フランスでは、特に修道士の活動によってチベット仏教がヨーロッパに知られるようになったのは、17 世紀のことである[2]。しかし、清朝は 20 世紀の初頭までわずかな学者や外交使節を除いて、永らく西洋への入国を拒んできた[3]。例えば、フランスの宣教師エヴァリスト・レジス・ユック（Évariste Régis Huc、1813〜1860）は 1844 年から内モンゴルを通って、1846 年 1 月 29 日にチベットのラサに到着したが、同年 3 月 15 日に清朝によりチベットから国外追放された[4]。

また、この時期のフランスにおける著名なチベット学者としては、アレクサンドラ・ダヴィッド＝ネール（Alexandra David-Néel、1868〜1969）がいる。彼女は 1918 年 7 月から 1921 年 2 月までの 3 年間、現在の青海省の塔爾（タール）寺に滞在していたことがある[5]。その後、彼女は、チベット仏教について多様な視点から論じることにより多大な功績を打ち立てているが、その研究成果が後のチベット仏教研究の貴重な資料となったことは言うまでもない。つまり、フランスにおける真のチベット仏教に関する研究は 20 世紀初頭から始まり、学問としての関心が持たれるようになったのである。

1960 年以降になると、ヨーロッパでは仏教に関心を持つ人々が増加し始めた。特に、チベット仏教の場合、ダライ・ラマの亡命により世界各国で仏教センターや仏教書籍の出版社が設立され、数万人を集めるイベントも開催されるようになった。これによって、外国に滞在しているラマ僧の説法とともに、チベット地域の仏教文化がヨーロッパに伝播することになった。こうして、祈禱や瞑想修行などの実践を行わないまでも、ヨーロッパにおいて、チベット仏教のイメージが一定程度形成されてきたと考えられる。

Ⅲ　チベット仏教研究に関する フランスと中国の差異

今回の派遣研究調査でもう一つ堀り下げたい事柄があった。それは、フランスと中国のチベット仏教研究が異

なっている点である。それぞれの差異に注目してみてはじめて、研究の方法と学術の水準がうかがえた。例えば、従来の中国の研究は、チベットの歴史やチベットと歴代の（中国本土）中央政府との関係に関する史料、およびチベット仏教の発展経過や伝播史、あるいは宗教思想、芸術などに関する研究は、とても関心の高い研究対象になっている。しかし、国外の多くの学術論文と比べると、中国のチベット仏教研究に関する論文は、あまり重視されていないように見受けられる。

チベットは中国における五自治区のなかの一つであり、チベット語はチベット族の母語である。だが、チベット仏教を研究する場合、チベット語の文献だけではなく、中国語やモンゴル語、および日本語や英語で書かれた文献も研究の補充資料として使用しなければならない。中国におけるチベット仏教の研究は、その豊富な資料の多さにより優位を占めていると思われる。しかし、この優位性は現在までの研究に現れていない。つまり、現段階の中国のチベット仏教研究はフランスにおける研究者らに注目されず、学術としての中国の地位は比較的、低く見られている。さらに『東方早報』の 2014 年 6 月 26 日の記事によれば、中国チベット学界の沈韋栄は「現段階的中国蔵学在国際蔵学界依然処于落後的地位。毎次参加国際蔵学会的中国代表人数衆多，但其中真有能力和他人対話、進行学術交流者則寥寥無几，更不用説扮演領導者的角色了。〔現段階の中国のチベット学は国際チベット学において依然として遅れた地位にある。毎回国際チベット学会に参加する中国代表は人数こそ多いが、その内で真に他国の研究者と対話し学術交流を進められる力を持った者はごく僅かである。指導者としての役割を果たす者に至っては言うまでもない〕」[6]と述べている。

中国におけるチベット仏教の研究者は、漢語以外の言語、例えばチベット語やサンスクリット語、あるいはモンゴル語などはあまり活用できてはいない。さらに、チベット仏教の研究をするためには、仏教学や宗教学などの基本的な理論を学ぶだけでなく、寺院の生活や修行の経験をしなければならない。

このような主張が、ダヴィッド＝ネール『*INITIATIONS AND INITIATES IN TIBET*』にはなされていた。そこには、チベット仏教における灌頂と修行を研究する場合、必ず大乗仏教と密教の理論を熟知しなければならないという見解が書かれてある。ダヴィッド＝ネールは、チベット語とサンスクリット語の正確な学習の重要性も強調している。さらに、チベット語を勉強するだけではなく、言葉の表現ができない仏教の修行に対して実践を通じて、心で共感する共同信仰など心意現象に関するものが重要だとも述べている[7]。

上述のように、ダヴィッド＝ネールは、日本のチベット仏教研究者、河口慧海や多田等観などと同じく実修の経験とチベット語の能力をあわせ持っていた。そのため、フランス研究者によるチベット仏教の研究は日本の研究にとても似ている状況にある。この両国の研究は中国に比べて約百年、早いといえるだろう。また、その研究は実経験・調査と語言の能力を重視していると考えられる。しかしながら、筆者がフランスで収集した先行研究を見た限りでは、この両国の研究は、中国の漢語で書かれた研究成果や文献、およびモンゴル語などの文献の引用をあまりしていないように思われる。

終わりに

今回のフランスにおける考察を通して、フランスと中国、および日本の三つの国家におけるチベット仏教研究の特徴と注目点の差異が、多少なりともわかっていた。そのなかで、フランスの研究者によるチベット仏教の研究状況は、現在多くの研究者がチベット仏教の絵画と儀礼などの研究に転向をしているように見える点で日本ととても似ているといえる。

周知のように、フランスと日本におけるチベット仏教の研究は中国より約百年、早いことである。しかしながら、中国における近年来の仏教に関する研究成果は、チベット仏教の原典を哲学研究に関連させるだけでなく、宗教学や社会学・民族学・民俗学など人文科学全般にもわたるようになってきている。このように多くの分野の学者、若手研究者たちが、チベット仏教の発展史や宗教思想などについて、より多くの関心を示し、質・量ともに多彩な成果をあげつつあるにもかかわらず、現段階の中国のチベット仏教研究はフランス、あるいは日本における研究者らに注目されず、学術界における中国の地位は比較的低く見られているのが実情である。

なぜ現代中国のチベット仏教研究が、国外の研究者らにさほど注目されないかについては、以下三つの要因があると思われる。

① チベット仏教の専門知識と言語、および実修体験と実地調査などがあまり重視されていない。

② チベット仏教寺院の生活や修行の実践を通じて、心で信仰など共感する心意現象に関するものが重視されていない。

③ チベットに関する政治的要因により、注目点が国外と比べると、多少異なったものになっている。

このような三つの原因によって、従来の中国での研究は、チベットの歴史やチベットと歴代の（中国本土）中央政府との関係に関する史料、およびチベット仏教の発展経過や伝播史、あるいは宗教思想、芸術などを中心に行われてきたため、必然的にチベット研究における中国

の地位は比較的低くみなされてきたのであると思われる。

今回のフランス考察は、短期間の調査経験であったが、多くの人々の協力により成果をあげることができた。お世話になったすべての人々に、言葉では言い表せないほどのお礼を述べたい。

【注】

(1) Kőrösi Csoma Sándor. *A DICTIONARY TIBETAN AND ENGLISH*, Calcutta: The Baptist Mission Press, 1834.

(2) デシデリ；薬師義美（訳）『チベットの報告Ⅰ』平凡社、1991年などを参照。

(3) チベットは、19世紀の終わりから20世紀の半ばには領土拡張や通商の思惑を持ったイギリスの植民主義の軍官であるサー・フランシス・エドワード・ヤングハズバンド（Sir Francis Edward Younghusband、1863〜1942）に、1940年に軍隊を連れてラサに侵入させていた。これを当時の中国当局は警戒したため、外国人の入境を拒んできたのである。それが当時「鎖国」と呼ばれた。詳しくは、D・スネルグローヴ、H・リチャードソン；奥村直司（訳）『チベット文化史』春秋社、2011年などを参照。

(4) Évariste Régis Huc；耿昇（訳）『韃靼西蔵旅行記』中国蔵学出版社、2012年、p. 9などを参照。

(5) 耿昇「法国女蔵学家大韋・妮尔伝」『中国辺疆史地研究』第2期、中国社会学科院中国辺疆研究所、1991年、p. 81などを参照。

(6) 人民文史ホームページ、2014年6月26日「追捧蔵伝佛教為何成為無法抵擋的新時尚？」http://history.people.com.cn/n/2014/0626/c386265-25205784.html、2017年9月28日に閲覧。

(7) 同書p. 9–10を参照。

Research on Tibetan Buddhism in France
Investigative Report to the East Asian Civilisation Research Centre of France

Graduate School of History and Folklore Studies Doctoral Program　GENDUNASIER

Introduction

My impression of France has always been a favorable one. Paris especially is the center of France's historic culture and a fascinating city where people hope to achieve their dreams. Paris is a favorite city of mine because of its high cultural level and broad-mindedness, attained through its history of intercultural exchanges. Therefore I felt very fortunate to be given a three-week opportunity to conduct research at the East Asian Civilisation Research Centre of France (Centre de recherches sur les civilisation de l'Asie orientale CRCAO) as part of an exchange program with the Kanagawa University Research Center for Nonwritten Cultural Materials.

I. Research at the East Asian Civilisation Research Centre

I am currently engaged in the investigation and study of "tradition and innovation" in Tibetan Buddhist monasteries, and was dispatched to the East Asian Civilisation Research Centre for three weeks of research from January 26 to February 14, 2017. The purpose of my research was to investigate materials collected from the Inner Mongolia and Tibetan regions during the period before and after World War II, and also to follow the footsteps of prominent European scholars of Tibetan Buddhism from the 19th century to the present age. My research goals were twofold: first, to examine the records and documents at the Centre, where many important advances in research have been made, and to exchange opinions with its researchers; and second, to investigate materials pertaining to Tibetan Buddhism on exhibit at the Guimet Museum (Musée Guimet).

During my stay in France I was able to receive instruction from the renowned anthropologist Professor Charles Ramble, who was president of the International Association for Tibetan Studies (IATS) [photo 1] up until 2013. Professor Ramble informed me of his research achievements and acquainted me with many materials on Tibetan Buddhism. It is also thanks to the professor's guidance that I was able to locate all the materials I needed in the library of the East Asian Civilisation Research Centre and compile a list. Furthermore, Director Marine Penicaud allowed me to make photographic records of materials for use in my research paper, using scanners and cameras at the Centre, and showed me examples of ドルマ, offerings used in the Bon religion of Nepal, which is Professor Ramble's current field of research. It was a

valuable experience comparing materials on Bon religion with those of the Balin Ceremony, the subject of my own research, as well as exchanging views with Professor Ramble and learning from him.

I also made some important discoveries in the process of collecting materials at museums during my stay. For example, I found many ritual implements, Buddhist statues, and *thangka* (Buddhist paintings) at the Tibetan exhibit area in the Guimet Museum [photos 2, 3]. I will introduce photographs of these materials in future papers.
(Photo captions)

II. Research on Tibetan Buddhism in Europe and development of its image

As is well known, the Hungarian scholar Csoma (Kőrösi Csoma Sándor, 1784～1842) studied the Tibetan language at a Tibetan Buddhist monastery in present-day Ladakh and compiled the world's first Tibetan language dictionary, *A DICTIONARY TIBETAN AND ENGLISH.*(1) His Tibetan-English dictionary contributed to advances in international Tibetan studies in later years. For his achievements, Csoma has been given the honorific title of the "father of Tibetology in the Western world."

It was in the 17th century that the existence of Tibetan Buddhism became known in Europe, mainly through missionary activities.(2) However, the Chinese Qing dynasty long prohibited Westerners from entering the country, with the exception of a handful of scholars and diplomatic missions, up until the early 20th century.(3) For instance, the French missionary Évariste Régis Huc (1813-1860) traveled through Inner Mongolia in 1844 and reached Lhasa, Tibet on January 29, 1846, but was banished from the country by Qing authorities on March 15 of the same year.(4)

A prominent French scholar of Tibetan studies during this period was Alexandra David-Néel (1868-1969), who stayed at the Ta'er Monastery in Qinhai Province for three years from July 1918 to February 1921.(5) She subsequently contributed greatly to the discipline through her ability to discourse on Tibetan Buddhism from a multifaceted perspective, and her research indisputably provided valuable material on which later studies in Tibetan Buddhism were based. In other words, research on Tibetan Buddhism in France began in earnest at the beginning of the 20th century and became an academic field of interest.

Interest in Buddhism grew in Europe after the 1960s. Particularly in the case of Tibetan Buddhism, the exile of the Dalai Lama triggered the establishment of Buddhist centers and publishers of books on Buddhism, and events attracting several thousand participants were also organized. Along with the teachings of lamas residing overseas, these activities enabled the Buddhist culture of the Tibetan region to become known widely across Europe. In this way, Europeans formed a specific image of Tibetan Buddhism, although they did not actually engage in practices such as prayer and meditation.

III. Differences in Tibetan Buddhism studies between France and China

There was another theme I wanted to explore during my stay in France, that being the difference in Tibetan Buddhism research between France and China. Focusing on their differences enables us to understand their respective research methodologies and academic levels. For instance, past Chinese research tended to focus on the study of historical records of Tibet, historical relationships between Tibet and successive Chinese central governments, the development of Tibetan Buddhism and its dissemination, and its religious philosophy and art. However, compared with academic researches of other countries, there seems to be little interest in the study of Tibetan Buddhism in China.

Tibet is one of the five autonomous regions in China, and the native language of the people is Tibetan. But the study of Tibetan Buddhism makes it necessary to refer to complementary sources in Chinese and Mongolian, and even in Japanese and English, in addition to documents in the Tibetan language. The greater volume of materials available to Chinese scholars might lead one to suppose that Chinese research would be more advanced than in other areas, yet at present this advantage does not seem to be utilized well in their research. As a result, current Chinese research on Tibetan Buddhism remains largely unnoticed by French scholars, and the academic level of Chinese research is considered comparatively inferior. Furthermore, in an article in the Dongfang zaobao (東方早報) on June 26, 2014, 沈韋栄 , a Chinese scholar of Tibetan studies stated that the status of Chinese re-

searchers remains low within the international academic community in the field. He described many Chinese representatives as participating in the International Association for Tibetan Studies conference every year, but few of them can truly engage in discourse and academic exchanges on an equal footing with the scholars of other countries.[6]

Chinese scholars of Tibetan Buddhism have not been able to adequately utilize materials written in languages other than Chinese, such as Tibetan, Sanskrit, and Mongolian. Moreover, the study of Tibetan Buddhism requires not only a basic knowledge of the underlying theories of Buddhism and religion, but also the experience of temple life and participation in its practices.

This assertion was made in David-Neel's *Initiations and Initiates in Tibet*, in which she puts forth the view that the study of *abhisheka* (consecration rituals) and *sadhana* (ascetic training) demands a thorough understanding of the principles of Mahayana and Vajrayana Buddhism. She also stresses the importance of accurately mastering the Tibetan and Sanskrit languages as well as engaging in Buddhist ascetic training to gain a fuller understanding of aspects which cannot be expressed verbally and to empathize with its spiritual aspects, such as joint worship practices.[7]

As mentioned above, David-Neel possessed both experience in the practices of Tibetan Buddhism and linguistic ability in the Tibetan language, as did such Japanese scholars of Tibetan Buddhism as Ekai Kawaguchi and Tokan Tada. Therefore, the state of Tibetan Buddhism studies in France is similar to that in Japan. Research in this field in the two countries can be described as roughly one hundred years ahead of China, and the research conducted also emphasizes the value of actual experience in religious practices, field studies, and linguistic ability. But as far I could determine from a perusal of previous research results collected during my stay in France, the scholars of the two countries hardly seem to refer to research results and literature written in Chinese or Mongolian.

Conclusion

The research opportunity in France deepened my understanding of the characteristics of Tibetan Buddhist studies and differences in their subjects of interest among the three countries of France, China and Japan. In France, it is evident that many scholars are shifting their research to subjects such as the art and rituals of Tibetan Buddhism, and this trend is very similar to the situation in Japan.

As previously mentioned, the state of Buddhist research in France and Japan is about a hundred years more advanced than in China. Nevertheless, recent Chinese research results in Buddhist studies are no longer limited to relating original Tibetan Buddhist texts to philosophical studies, but now range across all fields of study in the humanities, including religious studies, sociology, ethnography, and folklore. In this way, Chinese scholars and young researchers from many different fields are exhibiting more interest in the developmental history and religious philosophy of Tibetan Buddhism. Yet despite these advances, present Chinese research into Tibetan Buddhism is unacknowledged by researchers in France and Japan, and the status of China's research in the academic world remains relatively low.

There seem to be three reasons for the international academic community's lack of interest in Tibetan Buddhism studies by Chinese researchers:

1) Lack of specialized knowledge of Tibetan Buddhism and the Tibetan language, as well as lack of experience in actual religious practices and field studies.
2) Less importance placed on empathizing with the spiritual and emotional aspects of Tibetan Buddhism, which can only be acquired by experiencing the life and ascetic practices of Tibetan Buddhism in its temples.
3) Different focuses of research than in other countries because of political factors affecting relations with Tibet.

The above three factors have led Chinese researchers to concentrate on historical documents pertaining to Tibetan Buddhism's relationship with successive Chinese central governments, studies of the development and dissemination of Tibetan Buddhism, or studies of the religious philosophy and art of Tibetan Buddhism, resulting in the relatively low status of Chinese research.

Although my stay in France on this occasion was brief,

I was able to conduct much valuable research, thanks to the assistance of many kind people. No words can adequately express my deep gratitude to those who extended their generous support.

[Notes]

(1) Kőrösi Csoma Sándor. *A Dictionary Tibetan and English*. Calcutta: The Baptist Mission Press, 1834.

(2) Based on sources including Desideri, *An Account of Tibet* (『チベットの報告』translated by Yoshimi Yakushi, Heibonsha, 1991).

(3) During the late 19th to the mid-20th century, England harbored ambitions to expand its colonial territory and foster trade, and to that end, Sir Francis Edward Younghusband (1863-1942) led a military expedition to Lhasa in 1940. The Chinese administration at the time prohibited foreigners from crossing their border out of fear of invasion. This was described as the isolationist policy of the country. David Snellgrove, Hugh Richardson, *A Cultural History of Tibet* (『チベット文化史』translated by Naoji Okumura, Shunjusha Publishing Co., 2011).

(4) Sources including Évariste Régis Huc, 耿昇（訳）『韃靼西蔵旅行記』中国蔵学出版社 2012, p. 9.

(5) 耿昇「法国女蔵学家大韋・妮尔伝」『中国辺疆史地研究』第 2 期，中国社会学科院中国辺疆研究所，1991，p. 81.

(6) Webpage of 人民文史 , June 26, 2014:「追捧蔵伝佛教為何成為無法抵擋的新時尚？」http://history.people.com.cn/n/2014/0626/c3S86265-25205784.html. Page viewed by the author on September 28, 2017.

(7) Ibid., pp. 9–10.